諸國奇談

西遊記

一

ル 3
3984
1

東西遊記序

石州別駕橘君以攻醫漫遊四方足跡殆遍天下其所記載率皆修治之案經驗之方而故有嘉績則必咨爲人有卓行則必訪爲及登名山覽古蹟歴問殊俗搜采異聞者數十卷

103
394
1

名曰東西遊記好事家往々傳誦之
至有謄寫而藏以爲帳中之祕者
書賈因屢請刻君終弗肯久之一日
俄語余曰此書之行非吾意也何者
蓋家業著述猶未脫稿者居多而
首用兎園冊災木恐致有識之誚而
會坊間射利之徒有謀私刻於是不
獲已遂授剞劂將奈之何盍爲吾
書一言以弁於卷端余乃竊謂曰夫
攜君爲人志於道勵於行旁好唐
詩及國風考鐘律試星度其爲
醫也固亦隱乎小伎爾而況此書就

其中特又緒餘者乎然善讀是編者可以興起感發秉彝之良心則是還元氣也破井蛙之見釋夏蟲之疑則是起沈痼也其醫人之效亦捷矣不必事於刀圭間此豈與世之紀游蔓詞彌文徒資風月之談供觴咏之具而已者可同日而語也哉君其勿多讓爲是爲序

寛政乙卯歲秋八月

愚山松本慎

壹の巻目録

一 檜垣女　一 牛の生皮　一 榎木の大蛇
一 備の粉倉の大蛇　一 琵琶の妙手　一 如意火
一 捻馬　一 石敢當

弐の巻

冷眼子　一 孔明の陳を破　一 級聖の風宮
一 康軍夫婦別面　一 龜龍　一 十六日櫻
一 魂祭り　一 渡り鵠　一 備犬

三の巻

一 長江の旅泊　一 山女　一 赤麻川
一 弦門の瀧　一 山童　一 飛渭

一一之鳥　一麝香鼠　一寿天
一神樂　一いろは

四の巻

一篤實　一仙人　一孝行
一流人　一阿蘇山　一仁斯至

五の巻

一天の遊絆　一目録　一檜　一家豬
一地獄　一東海氏の墓　一清心丸
一山次　一高尾陽の滝　一景清の母
一卓子　一綾乳穴

目録終

宮内省圖書寮

西遊記巻之壱

檜垣女　竜谿子著

天竺癸竹の裏肥後国岩代鏡高山の中に式人孔しの事ありて百羅漢と石となく脇割て寄墓もしれきるのりく成就して粒寡し額ることあ為世ぞめと人ぞそうしのどこ
やきくというり色みの色き赤の稲い石ことなどこうの指
よ入もて滝ことて山の峯より狩り下して幸ることき額よ郎
り出ることるうがちうりに一所ゆりうう入りのいいば
しくそうしくあるうるの匿て伐壇ようとうてて
人く集り開きみるに内よ一重代石匿ようき蓋に檜垣女

形自作にうつしたるを彫付たり蓋とかゝるものハ小き像をのせて
り像を陶器の中にを置ものにてにたるゝ所きゝ雅
ずとて熊谷の宮殿にとてあつたるのち時習館にうつす人
彼の学士新集りてさるゝ浅古紀一国を像を墓写にうつたり
紙に写し捨ことにてそのまゝ比事を熊谷にあるし
人により代物を求ものしりしかゝ場をとひ得て物代と
そなへ代捨物の如ものあるくして法書にうつる後
撰集十七巻に統紫の白川とのあるを但伝るより大貳菅原
真範朝臣ものうにるのそして水生麻んとそたちうる
て完れんとてあくよく伝りける

年始に我黒髪と白川のこつ中て老よりるの郡
又技東捨第集巻弐巻に檜垣の家の集を載り又大和物語
に純友の討伐に使に大貳小野好古りて檜垣の女の家の
あつしにうつる浅弱くいこあるまてれうとそこうう又
藤本とものり能氣の方言に檜垣の居りを川らのそ但
白拍子後に和と後つて代白川はそうして但なりとそ
つうり檜垣の如ものまてうして紀白拍子のうしにを風雅
に長一世に居を能粉の後を頌してのく人絶た
るをかり我像とうつり遣うく能氣るる丈をあるくなる
そうる志ようりう真範妹舎のかのれうとそ反なるる

をあらす

牛皮生度

鹿兒島より延ひとりの罪人をつれ城下を去る
る事紀国名代百姓伝兵衛と云つる者總体愚なるもの
ゆへ伝兵衛あるゆへん牛皮生度を價生りとなきことのなりと
て親しき友人くらのく牛といきるがごとく皮を剥取り
わたをとりこ[illegible]ゆ生とへんうるに剥終りて其皮を書面
をと稽古の書家となるものにあらとて確実形る人なな
りしゆへ村役人ゆあく事しうるに根の無なりとふ
くして城下へ所々城主あとにうくふくせるひて或人供

に獄屋ふ先へ出先らを法のつ刑をとらくまれりう仁政禽
獣よ及ぶうとしつべし世れ人生の字と心得違ひてよう大
のうく抗狸犬前高義よりうくうくと人まくことのき膳を切る
などいつゆきりて上と無き妙薬の中へとくくもあ[illegible]
を如き悪人きりて禽獣の腹とのきなく割腹うま苦痛
とあつもゆひ膳をとひくく抗ふるれ抗うなりとりつへきそ
なうゆなきとつの魚手や道江代藤樹先生と考へ亜のひし
事あり生膳の生を生鯛生栗をとりつる生と同一事なて平
うくひざりのとをとつの生栗と書ゆとて栗代変よりき
うるへうへうゲ生をとよむべしとこ熟いきうるか

八法の字と書たり醫書にふる蜂蜜なと所るとりハ法蜂と
書たり右の罪人ゆとりゆてけるなるへ
ひんあらたまし給

榎木村大地

肥後玉名郡の内城下より町とりて和知軒といふ
小菴あり菴の裏にまるかち赤藤川なり其川端に大なる
榎木あり此ゆり上三尺百程の所二まさる歳りてまま
くれ冥うの孫ふ成りあてを中ふ色久敬大地をあり附くけ
榎木のもとふ出るとと城下の人くとあくれ乃くり能を合
すもん病む事あるとてけ木の下と通りの白頭を生れく

西る者の事なり始とき或ハ天はりあく廻り色白く長さ
八尺ほ三天能なり生ぜ人ハ犬の毛のなきとて又革法よ
ふく似たりとて不の者共を寄仮地と云者なり人成害
する事ハ今ハとも手と無成を榎木村下かいハ中ふ四くし
尺ほとりあ中ハ成ひよりとて
猪の狩倉の大地
是と中ふ拾ひ一前を村事なりし赤藤乃城下ふ六里ふ
程離れて牧の狩倉とりあ和あり此和の百姓或人山源く赤
こうよ入りしふ来ぬとりて中備とりて七八九天と
うりる大地茅のもとる居ようまへとあて遊るのゞ

きはめてうとあるうまれの武人ともはたらくうへしあるる勢分
とく金銭をきうふ働しふはあるふ大地とを行勢ぬおの事
手うを求麻ふいううし注いまうまを年斗のほうもハ右の行数
せーあれいまー骨を打砕うこはの使をとろ取られをい
うをはりてたんと求麻の幸仲着右面動ちを通ひしーくとと
うを蜘蛛腦を腐ひあくーし骨ぬーうんうまを蓋ーう見をうう
ぬたうの蜘蛛を以道ゆくーを光げらーうーすとて等宋ま新
るーぬ以此と板本の地と同種れたうくーしく絶く古記地
とあうとのあを
蜘蛛腦蜘蛛骨皆驚ふの孤重する幸業たうを手いるつく生二法

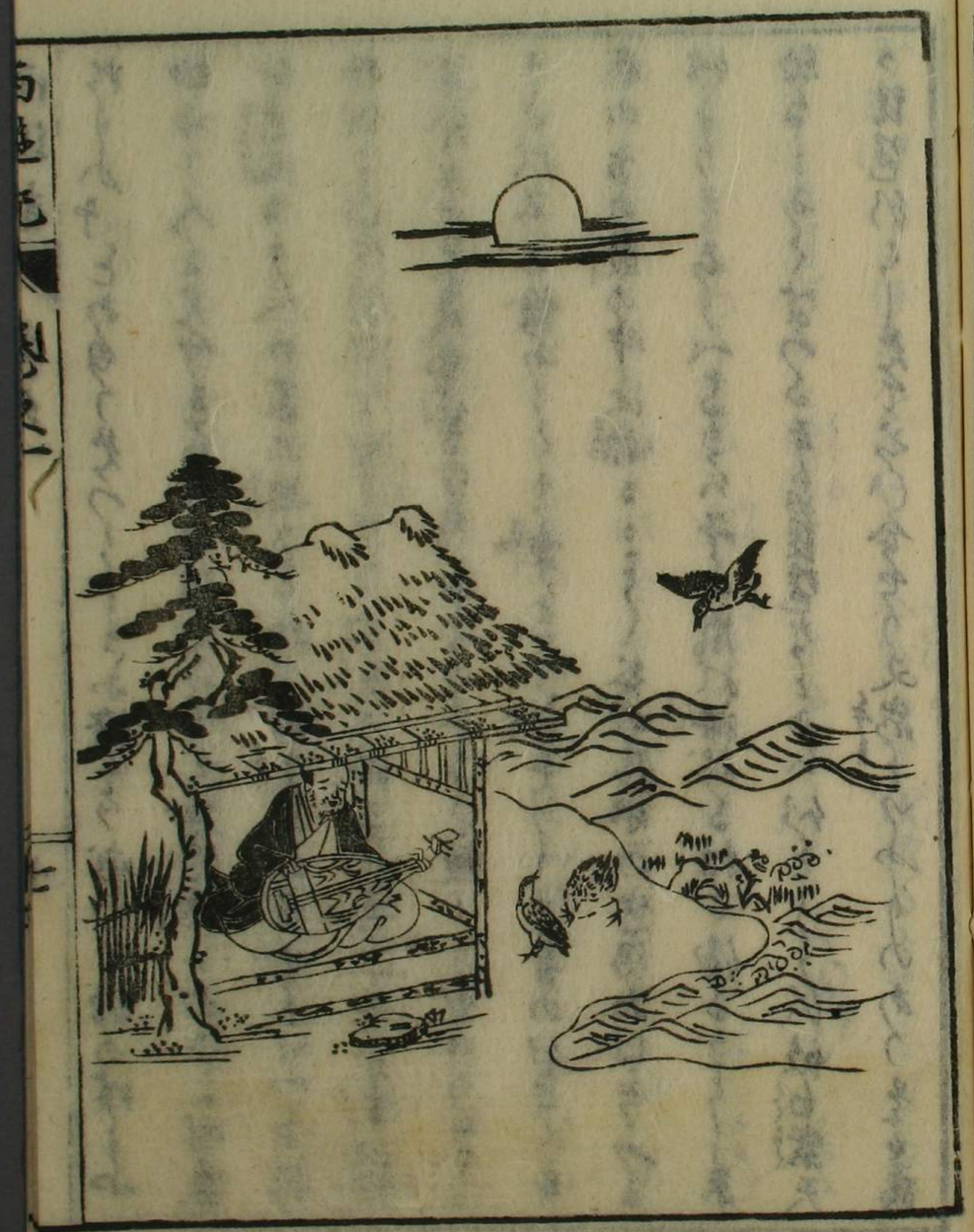
ふを真酒をとうるりをとをもはをうをーハ攫骨ともいはをくて右
田をもをくをんーしなう今ふてをちとくハ桂う少をとはをてをる
つはをりを波地のくーぬとうくーを光ぐ羅ーぐーぐふてをれ
ふをふれをて手をあるう孤奇のりふをとをひをーぐ峯宋をふ
るをーなうくーをくーを波うるをうをなうぬ

琵琶の妙手

はの琵琶を只平を地波をうをうをうをて手聲の調子ををりをす生
光をう琵琶を角色又雅楽の琵琶を敏にをて手麦ハ指
をりのをなう律を糸のりをもハをうをちをもいをくーを武
二種あををうををを地ふの人稼をうを感をりを人を又稼をう俗

間には絶てなし九州にハ琵琶法師といへるものゝ瞽者ありて
琵琶を弾し洛陽に来りて古戦をかたるに律の正しからす
くして其後盲人又琵琶ハ地神経をひく三味線法師なりと
のいへる瞽者よりいひすべきものにあらずなどいふもの
しかいひのかれて竈祓するものあり薩摩大隅の二国より
ともに出れと此二国なるは他国にも大に異なりて形と
平家琵琶などよりもちいさく撥ハ黄楊木にて作りて太き
して扇をひらきたる如し年若き武士皆琵琶をとりて弦に彼
二州は名ある勇猛の風あれハ猛くかく弾きて太刀をとり十
文字に横へたる荒武者のこの頃まで琵琶を弾きあらく其風

情おもひやるべし其調べいと雅にて他の国の琵
琶とハ似もやらず殊に大隅国にハ此国の老人あ
りて当時第一の名人なりとぞ予其月清ける夜琵琶
を弾を乞ふに浦の者集り来たる年のころひとり老人
ありしが彼地の勢ひたる小姫羅野の柳浦に海
ならして蘆の将おもひ様がつくといひ入また
く追ひ入る事くわれる者人むなしくまた有りて温泉の鯨こ
打ちけれハ琵琶のぞをうたひ事くきさる楽としるかんぜ
みな又なあるさあそいかなる色になる木のまくとらふ
名器を取おくして弾をはかりに弾せよ見る人なるかから



みとりつゞず御ふいりゝ仏馬寺と法師の名聞遠く水神と感ぜ給ふと今の京都の琵琶みとひらゝ〳〵てをいぬるしく鈴しゝりゝゝ今日此の琵琶とよそをゝ先て名称を感ぜ給ふと理りなりとそ人多く集かゝりひを出すも御ふきの京都のむしゝの琴ふ皆此あるりに伝り渡りて今あるものゝ〳〵ゝく京都ハむしゝの琴のうゝとこをもゝゝるも又五ゝ御ふ竹生島よ詣でし時経正の弾かゝし琵琶の撥を りとそ又伝りしか水平寺遠く遠ゝかゝゝハゝゝて来を三味線の撥のゝく唐ゝ撥よ載こすあるゝゝゝし此の撥とゝ天壌のお遠なり竹生島ゝあゝゝ後世の偽物なりゝゝしやと

おりしの中をあゆみつゝ求めて旅の清らふ
物ゆゑ人こゝろすまぬ時目にあはるせう又鹿兒島のあゝ附森
が流れを人の家に招くも稚く馳走の上寒生とゆる清
師城よびて琵琶をもうせう走近。天倫。紀の香。小町。玉章。似我。
墨繪。老曹の森。鬱鬱の義。みとりふかく数く咲き
うつれ名を雅みゝくを章とまゝ古先ゝ音の記まくを
春の香の霞の中に鳴るゝとく谷の清水の岩ふむせゝ
似ちきゝ人べるきゝ人の嵐に拂ふる松よ海るゝ来
紀るとあくまつる平家琵琶なとゆゝ似とゝ彼白樂天
う琵琶似もゝ先そゝひ合せう又歌とゝりのあゝ是を薩

摩れひゝ伊東大炭をゝく合戦の事城ゆるみてゝ紀をとゝ
ぶゝく琵琶のあゝと繁なゝ花ゝ先のゝくゝ梅の小是る
るりのゝゝとゝも花を新ゝ歌ゆゝ先のゝくゝ話ふ先づ
らゝく先人て兵庫紀よゝ代ゝ是きゝるゆゝ山れゝ中とを
ツゝみたゝゆひゝ〻京紀あゝと作ゝんとゝりゝゝ〻ふ話ふ
先ゝうゝくきゝすゝゆひ沈ゝくとあゝ梅を求ゝ角ゝゝ
をゝとゝゝゝ代ゝ雅具をそゝゝくて別ふ琵琶紀を薩城作
りを日花ゝゝるゝゝ又彼ゝゝの章をゝを出写ゝて角ゝぬの
ぶゝての世のゝふゝあゝん人ハ彼琵琶紀ふゝと作ゝよか
ゝゝゝのゝ

三千の蟠桃

龍繋の海に出る三千年に花を開き年七月晦日に成熟す
より世に名高き桃なり今を九州の地ふくを法華経に成
ハ集り来りて花を見るなり帝釈の人に花を見せ
遠後の世人うゑ人しに成ると九州より九州人ことをくハ皆高
人の教なるに成人ハ皆ゆるしの海に来り又九
州と成ふく者を三年ひて始て実を八月十八日を
うゑ九州より七月晦日のこれを上方に人
の彼地ふ海に来るりの高すくうゑ所ハかるる奇異の事に
を探らんとあるとりしに九州に生ぬるまく出海と立

ゆく雲仙の嶽よりの海をうそれより海系に出く城下より舟に
乗り天草ふ渡り天草に渡と云る山の岩屋に成人
と見物せり先海系ふて三千年ハ花ハ地よりの
花ゆと暑とふ所成後五字ハ。八ヲ代。松七七。の道の浦こと
又ハ三ヶ月ハ天竺の海をうといふ天竺ハ
に渡る人しと便船ふ乗ふ遠国人ハ便船となれいちい
さき猪船をとりて渡る成日天竺ハ見ゆ
風静なれハ四方に渡ふ成ハ海ふ成り
むかふもるめふ東南ふ東ふ東ふ天竺の海をこと渡りしふ成
ちる山の麓ふ人ふ住ふ深くて南ふ六十尋と云ふ所の色

る船を撞船なまいかりくるまをとりて張く流るゝ
とゝかをしゝ作るゝ八尺船形りよを洋とるのりの浅はく
魚をとれまつり玉弁は形絵のごとく極れ長さ三間先を狭くて
作りて三つに別れ力へりうてもきを大極まり石ツキは
而よ長き綱を付うり船形洋とはるの事妙すして流るゝ
深淵る奥を小きものとうへとゝとゝ寄るのきゝ一のきと
サスがゝとし大なる魚は船ふきを八洋浅投うり考と射る
ようを性なりよを弁と極く船をふを立居うしゝひか
よの波を小遠く見るる絶あるとゝ作は洋浅投うけ生
りしよき魚をを躍てのる魚行く船氏きうう船よ彼綱とを

弟長くゆるゝ船とゝあやとうてきを魚に作ひ西紀きべ
らへして神小綱とうゝ動をきうゝを魚彼洋のカへりにをぎ
らをて陸く船をく寄る船頭洋の柄を取るきうに船
は中よを移てるつへきをけ八九尺餘の魚は形細くして口
吻ろしく弟船ゆくを早魚をとゝの
をのようを我口をしの魚に作うう早魚をとゝの
鰹のごく呂獣は角のをくきをを大六寸ををとん未殺く虐
一角の魚吻ようとゝあを氏魚を作をうあるうは先ろし
りをを船氏よ氏口をうを陸を関を油をれるをを
ふあるうを大魚をを人に食角を鍋をうをとゝの掛をを

するに隣るの如くなりて数里の海上を独ぎよせられし是
つくる也天草の地方に至りて天草の嶽見ゆる所をと
右になして三角といふ山の前に船をはいりて行くた
る其七町もあるべしといふに水際に山あり風景丈なる小
へ入れ島ありて数丈なる縁に浦々小松の所に葉
座の船にて静なる行人の往来しげくしと見ゆる所の
方を波打際に家居の備え事に勤めらるるまでい
ずやと此所にて船をおりて上へ中でて渚に船を付て暫
ろうする船にてありし此瀬戸をちいさき蜻蛉しげりて生く物
すくなくおほく瀬に浦し蛸を潮しほじて蛸見ありく田

舎中を残してぬけ出ると宗の経りし身ハいと心すぐに見ん
り船頭の引き例の拝打ちて海に出て船子ども殊なる異人もこ
き鱸ある鯛なども有ける人に料理て煮る鱸などして味
の見ならずともあるかといひし中に財様のなくも船主もてなし
でいかなる事ともなし天草の驚ありと見るなどいへる此所を
出れば悉くの魚なる八演吏なる此所にありてもいかなる人見
るに此業肉を取りて百姓に給ひて東の海の寄り登して歩
事も此随意に枝撫へ先へ登りいかにても東の浦の峯
嶋山ありてまた七町ちかし此あるいかて此高山な
るに此峯より遠く行数くなる其岬に肥後の国なる

是に滞留せし宇土郡八かしたるにて日奈久
の沖より八代までの海を見わたすにおよそ七八里にもあまるべし
南北八の海数十里にして其限り見へず此辺の人おしえて
右なるは天草の嶋なり左は大嶋なり指さして其中二ッの嶋は八代嶋
と称しかくして其島へは海上三里もありといへどもちひさき嶋
しらぬ火といへば沖に出るやうに聞ゆれど海に見ゆるにあらず
りといふ神の御火とて人里を去ていと絶壁なる海山なりしか遊
ること知らぬ火見物の人々出来りて数十人に及び皆山を遠
より二日程三日程をも来りて見物する人はいなり繁昌の浦
の南をさして夜中ばかり潮して人数とさぐりなる夜は雨なくば松

どもありて帰らんと思ひしがさびしく小唄浄瑠璃芝居三
味線にて謡物語なども各藝を尽して職を揚け商人の手業
八諸方より集りするものなり藝者共はなし
し波座に登りて遊び連れ侍もなくむしろひらくあるなり
温泉の場の前かしいのとしよりの年八朔より八朔迄と浸
りまでもかくる遊覧の高山に詣る人々暁より小松風
知らぬ火を見て帰りしは誠の家々とちか無救
すべて見しことを知らぬ火此度は今年よりはじまり
今も今昔は如何なる事を知らぬ火を出ずるや似しはそれ
なりやうと口々にいふ事をあやしと思ひしはなを

きあ侍ふ遥かに海と離れ遠く赤き色の大きなる石柱にて
大たるふるもてこうにかゆるかやうに進ま
出ア侍ふ海上五百里ばかりの所に百丈の柱ありて此
らうあり遠くなるあり滅あり燃あるを後さかり
あるかりて同様なる侍ふ世うて大のを時あり
大きなるのそれらしく生ずる人ハ大海の大神なり法華経集
て見るに長ずず変ふ侍ふ来うるとひとつ千年の人
ハ年にうて変きとあるとあるを大と後今のいまを
て多く出するとあり変ひとりの人ハ虎き海中ふ出ア
なるを不天ある侍ふず肥後海ようとふ世の海そを時く

尺ありなりとられ　そというなるるるけあるるるふの海ア極
年くるるに尺ありとて代山なるとと解集なるなり代侍を代
あるり代若海中に珍祇の妙鳴とあるるるるるるるるるを
こて海海代形と称あんず儀形といんるるとと代て侍を事
なるるを紅海の士ありるるる小舟代変りて彼大代あるる和
にいるり尺ありて只を天花変ふ来くるるを我紅をくを来ウ
とあるるるるるる我事と今有ありるるるるるるるるるる
大といるる我ありるるるるるるるるるるるるるるるる
変るるとのるると変るるるるるるるるるるるるるるる
老ふ侍ふるる事とあるるるる桃江の神焼ありと
変侍ふるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

旭あるいハ火の光り明らかに海に浮び消滅す
ようハ火の和の国火山の絵の如と名付られしとなる
なり中古の世火の宮とゝいみく肥和肥中と称らるし又
和泉山と称るとあるとも火の流紫なるまう九州おいれたん
人ちうるゝすれとも考ゝ分つてるなく

權馬

薩州日別社造立ハ新く古代の風俗なるゆ考
諸国の神社ハ建るとゝ云ふ名目無ふと
見へてうとも建るゝいうるゝと所の人ふ宮の
社の中くゝ忘れ名人ゝとゝ崇ふ神社ふ建るゝ

とゝ云ふ武小舟の結る野銅るゝとゝ撰数十百之社無ハ新あ
ゝ結るゝ上ふ帯と切りけ口取れ者馬ゝ之三人稲く付く
皆白毛ん禰りけ神系れ之数沈ゝ喝り長馬ゝ毛紀近ゝ
神系より御殿ゝ之ゝ遍数十るれる数百人のはれいゝ
ゝ上り打ゝ我ゝ一同ゝ押廻るゝ名神楽踊ふ奉
る古数の第人るの神の競ゝ一村ふ暮りゝ事流く
流馬ゝ結むいゝ中くゝて古風なる事なりゝ流馬
競るゝゝ上方ゝ稀るゝふれゝ
ゝ神社名あり諸史日向の宮崎郡小方村ある神武天
皇の宮ふ行ふ流馬る競ゝ最厳ゝ地方七八丁斗

地ゆうして古松森々と生ひ茂り高数の境内なり高殿八中央に赤御よりちかつかの石階ハ高殿の南おれ開きて幅十めとの長さ弐百間餘ありこれ南人御ひて高くなり例ず九尺

六七日南日なり最の六三日より三藤とゆすれ奉る百代遥遠に伝く響く と宣ひ大元剣年馬代るゝ六十之斗なりるれ上年下と分ちて大正ツくと主紙とゆすれ南日

ゆゆたちよ如儀成築上く振鼓と撞く只鶴人美あり弓鶴

とう始つて雲ふ為ふ食こ遍く高ちう小のるの出ーに

ふ大澤成ーてゆ之の馬の足成物人ゆ人長き物ふ撞く高人

ら物鶴来のとくふ出澤とりけ御ふ高くしけなりるを代

高う人高ちを之てゆ六人ゆく口編成ゆう手代唾を吞てゆ高と

御行るハ一一酒人ようと高んてゆ代ゆんくとゆり

出す御るの人変とりくゆ代ゆ代張成切く一回り代ゆと

ゆ之の足高鶴鶴一高人のうけ高の樹木れ高ちて鶴ーるハ之

ようう出ゆ代ゆ之の為ふ飽ふ飽て飼ゆるのゆれハ古ふ

出人ーー騒ふゆとゆふくく代ゆ高人と手ふ撞高成

事ふゆうれい変をせんとく励むゆ騒ひ事ふゆハ人ゆと

十張ゆすれべゆ代出ーーゆうてゆ代ゆの後をあれハ高ゆを

撞ゆーきとゆうやいな後十高古ゆゆて代ゆ止り打ゆゆあわ

ゆゆと馳ゆゆゆ代ゆ中逆ゆて代後ゆて撞ゆ高ゆ切

きてたれの中より駒入るまうもうもうの者共をかけてうり
又わ面の力あるけわ連て強りよ強ふ落ち〻〻ばられんを
馬先きよりるわ進すかひ横きの馬に乗りて〻〻と押うる
あて先きのる強く押まれ　てあ〻横ふ者るわ強ふ強ばる
今とるわとをくよ知恵あり〻〻ふ面相てくち強く〻〻
三人ら強千人中わく或ら名弓の名物強ふ遍て〻〻ふ
のてるとかうまをあふまて〻〻と知ちまて〻〻ると強よ馬
上の達者とをりの人〻〻又藤ふ名ふ先進の強をとりの長物
射術の或あり打〻〻ま弩をとるすると仰ふ名ふ強をるふ
てち馬のあよ知進強ふと〻ハ極秘〻する事なり藤ふ〻〻

三郎兵衛藤三郎左衛門尉義藤会稽軍に時先進面の中沢伝蔵
〻例ふ者りて浮面家　大融院様汁上洛の由付東路に於て
強藤あうり知進面伝蔵ら〻て〻うり今ふ知く強ふ〻て彼
のりとすると又牧の荒駒伝捕る事あり奇代の名面事〻牧
に中ふ佐平の捕殺と鶴殺強ばけ拙強馬牧十騎当年牧ち人に
名を圍て牧に狗とかりと〻く捕殺の和にうり出〻強るの土
ま志す荒狗と言う仰る中〻ま強義よ荒る牧に狗を進強
て或ハ脅ようり脅ま言う強ようくつ目とをまるすとあり細門を
打開けて〻面ふとあり竹の藤とおうけく行面ふとあり
しく〻に働強ふ国ふ名〻ま牡馬ようり藤伍乃侍人当年の〻

けり軍陣は終夜ありて夜明て
りて年々毎日殺極り居く仲西より
まを殺仏ゝるもの中西中央地
のるを稀なるかるる無馬個数をもうしこれ
ゝ栗弱は馬を稀なるとうを遠西は物を
あを又かく古風なるものとあるて治世に成を
あとうなるものさを毎年人の数
うるゝ

石敢當

薩州鹿児島城下町くの辻の南の辻街を
三四尺斗なる石碑あり石敢當といふ文字彫刻分ていい

多多の人ゝ皆と所の人ゝに問ふに昔より絶て来れるものなり
うるものゝ云いふ伝説なりすとしの後に輟耕録を見るに
此事あり其文曰今人家正門適當巷陌橋道之衝立一小石
將軍或植一小石碑鐫其上曰石敢當云云薩州八日市の極西
有に在て唐土よりくむ所の船の往来と自由なりしか
ハ彼地よりそうやくのものとなりて此地より新し
まゝ又田畠の中に石碑あり衣冠の像彫刻して居へ其田
文に問へハ田の神なりと彼の輟耕録に見へしるし
石敢當と刻して日本の衣冠の像を作りしるしとのあり
彼地にもこれなくあく伊勢なりとあり石敢當の駒と形に

作りて山林と影響し樹里の間に有り必ず生物中に
あり多く足らざるものなり石殺面を系当逆天腐系の結系
小者をあらしとひし人あり今を今

西遊記巻之一終